

比較読み教材を活用した知を統合する探究的単元の開発—実践編

研究代表者 東京学芸大学附属国際中等教育学校 杉本紀子
共同研究者 東京学芸大学 千田洋幸
東京学芸大学附属国際中等教育学校
浅井悦代 宇佐見尚子 高松美紀
西村 諭 廣瀬 充 山根正博
東京学芸大学附属高等学校 若宮知佐
高知県立高知国際高等学校 横田 哲
横浜市立東高等学校 影山 諒
ドルトン東京学園 小岩井 僚
広島県立広島叡智学園中学校高等学校 柴田美月

目 次

1. 研究プロジェクトの概要	74
2. 比較読みの授業を支える論理（千田 洋幸：東京学芸大学）	75
3. 実践例・単元例	76
3. 1. 単元名 古典と近代との比較—主題の違いを生み出すものは何か（対象 高校3年生）	76
3. 2. 単元名 人間の創造性（対象 高校3年生）	77
3. 3. 単元名 文学の役割（対象 高校3年生）	78
3. 4. 単元名 あなたと誰かの三日夜餅（対象 高校3年生）	79
3. 5. 単元名 「声」（対象 高校2年生）	80
3. 6. 単元名 英雄の語り方（対象 高校2年生）	80
3. 7. 単元名 『方丈記』で描かれている災害をどのように伝えるか（対象 高校2年生）	82
3. 8. 単元名 「プレゼン・ノート」（対象 高校1年生）	82
3. 9. 単元名 言葉と私（対象 高校1年生）	83
3. 10. 単元名 象徴とコミュニケーション（対象 中学校3年生）	84
4. 比較・関連づけの焦点—テキストをどう組み合わせるか	85
5. 今後の課題と次年度の展望	86
引用文献	86

比較読み教材を活用した知を統合する探究的単元の開発—実践編

研究代表者 東京学芸大学附属国際中等教育学校 杉本紀子
共同研究者 東京学芸大学 千田洋幸
東京学芸大学附属国際中等教育学校
浅井悦代 宇佐見尚子 高松美紀
西村 諭 廣瀬 充 山根正博
東京学芸大学附属高等学校 若宮知佐
高知県立高知国際高等学校 横田 哲
横浜市立東高等学校 影山 諒
ドルトン東京学園 小岩井 僚
広島県立広島叡智学園中学校高等学校 柴田美月

1. 研究プロジェクトの概要

本研究は新学習指導要領の実施に伴い、高等学校国語科において新たに求められる教材開発・単元開発の切り口を探ることを目的とし、令和3年度・令和4年度と継続して附属国際中等教育学校国語科を中心に大学・公立・私立校の国語科教員によって取り組んでいるものである。

□目的

平成29年中学校学習指導要領および平成30年高等学校学習指導要領において掲げられている「知の統合」の具体的な姿を探り、その実現に向けて新たな教材観のもとで探究的な単元設計のあり方を提案することを目的とする。

□令和4年度プロジェクトの目標

令和3年度同様、比較読み・つなげ読みに焦点をあてた教材開発・単元開発を行うとともに、それらを可能な限り実践することで実践例のデータ量を増やし、比較読み・つなげ読み単元の体系化を目指す。また、令和3年度では実施できなかった効果検証に取り組み、本研究の意義を明らかにする。

□本研究の意義

本研究の意義は新たに求められる学びにおける「知の統合」を具現化するところにある。従来からも「総合的な学び」「包括的な学び」という学びのスタイルや形は提唱されているが、総合的探究の時間ではなく、具体的な教科の中で、どのような仕組みや仕掛けがその学びを支え作用するのかを検証する余地はまだ残されている。また、中学校高等学校の国語科の実践をもとに、「比較読み・つなげ読み」の単元をそのねらいや効果を焦点として体系化することで、従来個々に行われてきた多くの実践の意義や効果を再評価することにもつながると思われる。

□研究の方法と計画

- ① 比較読み教材開発・単元開発の先行研究・実践調査
- ② 比較読み教材の新規開発検討
- ③ 比較読み教材を活用した単元開発と実践

※①～③の方法については、令和3年度の報告書記載の内容と同一のものであるため、ここでは内容を省略す

る。

④ ③の実践を通じた効果検証

令和4年度においては、一部の実践における学習の効果を、単元の総括的評価課題、生徒の振り返り、および教員の振り返りによって検証することができた。

□研究と実践

- ・令和4年度 研究月例会実施：全4回

2022年（令和4年）7月24日・8月12日・12月4日・2023年（令和5年）1月8日

今年度は昨年度よりも月例会の回数を減らした。昨年度は月例会で集まって単元のイメージや単元案を出し合う活動を集中的に行っていたが、今年度は各自が実践するための準備や期間を確保することを優先したためである。一方で今年度は東京学芸大学の千田先生に「比較読み単元」の体系化を目指すにあたっての枠組みの考え方について講義と提案を頂くこともでき、研究グループのメンバーが自分の設計した単元について整理するよい支援となった。

- ・単元案一覧表作成

Google drive 上でスプレッドシートを共有して作成。令和3年度・4年度の2年間で36単元案・のべ122教材（2023年1月現在）のリストを作成した。単元一覧表の一部を今年度も本稿末尾に付録として示す。

2. 比較読みの授業を支える論理（千田 洋幸：東京学芸大学）

比較読みを国語科の授業に導入する意義については、大きく二つの観点から言及することができる。一つは学習者のリテラシー育成という観点であり、もう一つは教材のポテンシャル拡張という観点である。もちろん前者を抜きにしてはそもそも授業の構想そのものが成り立たず、また教材あるいはコンテンツ・ベース一辺倒の授業手法に関しては、コンピテンシー・ベースの立場からさまざまな批判がなされているところでもある（たとえば森美智代「ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する」2018 など）。しかし、比較読みの実践は新しい教材の創造なくしては成り立たないのであり、さまざまなメディア、ジャンル、テキストへの広い知見が必須であることは言うまでもない。よって私たちに必要なのは、この二つの立場が有機的に統合されること——学習のねらいが比較読み教材の“知”と必然的に結びつき、学習者に専有（appropriation）されること——であると考えべきだろう。

同時に、現代の小学生・中学生・高校生がおかれている文化環境の多様性についても認識しておかなければならない。現代文化の特質は、視覚性の拡張（文字言語と図像・映像・動画の融合。ライトノベルや視覚系コンテンツなど）、聴覚性の拡張（人間の音声の概念の変革。ボーカロイド、J-POP など）、身体性の拡張（参加型・身体動員型コンテンツの一般化。2.5次元文化、アイドル文化など）という形で一応整理することができるが、児童・生徒はこれらのメディア、ジャンルを軽々と横断し、趣味と娯楽の対象とする。大量流通するコンテンツはその多くが複雑なハイブリッドによって構成され、かつ新しい創造物が生み出されるたびに受容する側の感覚や身体も組み換えられ、自在に対応していく。学習者がこうした文化環境の中で生きていることを前提とするなら、複数のテキストを導入する比較読みこそ、むしろ当然かつ必然的な授業形態と言うべきだろう。

また、そもそも文化テキストが内包する複数性、間テキスト性に関しては、ミハイル・バフチン、ロラン・バルト、ジュリア・クリステヴァなど、多くの思想家がすでに指摘してきたことでもあった。現在、いわゆるアダプテーションの理論が過去の文学理論をさらに発展させる実践を行っており、その認識は、「文学という文字メディアが映像をはじめとする他のメディアにアダプトされる時、あるいは、あるジャンルの小説が他のジャンルの小説にアダプトされる時、一体何が起きているのか。アダプテーション理論が探究するのは、こういう問題です。そして、こういう問題について考えるということは、結局、文化の中で文字や映像、あるいは音声や

さまざまなパフォーマンスが担っている機能や役割について考えることでもあります」(武田悠一「アダプテーション批評に向けて」2017)という言葉に集約される。学習者が到達すべきリテラシーの水準を想定しつつ教材導入のバリエーションを考えてみると、アダプテーション理論はさまざまな示唆を与えてくれるのである。

これに基づき、比較読み教材について以下のような区分を考えることができるだろう。

- プレテキスト：テキストに対し時間的に先行し、明瞭な影響関係(引用／被引用)を持つテキスト。
- メタテキスト：テキストに対して時間的に後行し、明瞭な影響関係(引用／被引用、再構成、オマージュ、批判などの存在)を持つテキスト。また、テキストについて語るテキスト。
- サブテキスト：(広義には上記二つも含む)テキストと内容・形式・表現上の関連が見いだされたテキスト。直接的な影響関係が無くても、授業者の教材解釈、授業方略しだいであらゆるテキストが召喚されうる。

ただし、これは比較読みの観点の一部しかフォローできておらず、個別教師のその時々の実践のみで消滅してしまいやすい教材開発の試みには、未だ理論化・体系化・系統化の困難がつきまとっている。今後、比較読みに資する教材開発、並びに授業実践の集団的蓄積と継承(データベース化)が、さらに一層推し進められなければならないだろう。

(文責 千田洋幸)

3. 実践例・単元例

以下に掲げるのは令和4年度に研究グループメンバーが実践した単元および設計した単元の例である。今年度においては、特に「比較読み・つなげ読み」の単元として、授業者がどのようなねらいを持ち、テキスト同士にどのような関係性を持たせて単元を設計したのかを明確にすべく、表の形で整理した。特に★で示した「比較・関連づけの焦点」については、設計の際にテキストを関連付ける接点・焦点として授業者が意識したものが示されている。以下高校3年生から中学3年生までの実践例・単元例を対象学年順に提示する。

3. 1. 単元名 古典と近代との比較—主題の違いを生み出すものは何か(対象 高校3年生)

科目名・学年	古典 A・6年(高校3年) / DP 文学 HL・6年(高校3年)
単元名	古典と近代との比較—主題の違いを生み出すものは何か
時間数	8(古典 A) / 10(DP 文学 HL)
授業者(発案者)	杉本 紀子(東京学芸大学附属国際中等教育学校)
テキスト	井原西鶴『武道伝来記』巻二の四「命とらるる人魚の海」(新日本古典文学大系 岩波書店 1989年4月) 太宰治『新釈諸国噺』「人魚の海」(岩波文庫 岩波書店 2004年9月)
★比較・関連付けの焦点	典拠と翻案の比較 / 「主題」の違いを生む要素
ねらい・意図	◆概念やテーマの理解の拡張 古典や近現代を問わず、文学作品を読む際に「主題」をどうとらえるかが授業の要になっていることは多い。しかし、そもそも主題とは何なのか、主題はなぜ、どのようにしてそれと判断できるのか、自分は読者としてどのようにその主題をとらえているのかについて生徒が常に意識的に学習しているとは限らない。今回は、典拠である古典の浮世草子とその翻案である近代の小説を比較・対照し、主題の違いとそれを生む要素を考えさせることで、「主題」という概念を理解し、主題がなぜ主題たりえるのかを言語化させることをねらいとした。

授業の概要	1 『武道伝来記』「命とらるる人魚の海」音読・概要把握 2 「命とらるる人魚の海」人物分析：自分達で選んだ人物について分析 3 「命とらるる人魚の海」人物分析共有 4 「命とらるる人魚の海」主題読解 5 『新釈諸国噺』「人魚の海」との比較・対照作業 自分で観点を設けて二作品を比較・対照する。 6 二作品の比較から見えることの共有 ※ DP 生は5時間目・6時間目の内容を時間増で学習 7 総括的評価課題作成 「二つの作品の主題の違いを述べ、その違いが何によってどのように形成されているのかを分析・考察する」 8 評価課題読み比べ・振り返り
*評価：総括的評価 (方法・観点等)	授業内でレポート作成。「二つの作品の主題の違いを述べ、その違いが何によってどのように形成されているのかを分析・考察する」 制限時間50分 字数制限なし。 手書き（縦書き原稿用紙800字詰め使用）。 持ち込み可。辞書・授業内で使用したプリント・テキスト。 観点は、IBDPの観点到準じて本校独自に定めている4観点（規準A 知識・理解／規準B 分析／規準C 構成／規準D 言語の使用）・各10点。生徒には事前にルーブリックを示している。
授業の成果・課題	・授業の成果① 古典を歴史的な文脈で読解したり、思想的な文脈で読解したりすることを面白がった生徒がいた。また、漢文で学んだ儒家思想の特徴を踏まえて考察するなど、知識を転用している姿も見られた。古典については、自分で時代背景を詳しく調べてレポート作成に臨んだ生徒がおり、時代背景がそれぞれの作品に大きく影響していて、同じ素材でも全く違う作品として読める要因になっているということに気づいて面白かったと振り返りで述べていた。 ・授業の成果② 生徒の振り返りとして複数挙がったのは、主題を決定づけているのは、ストーリーではなくむしろ設定や細かな描写にあるのではないかと気づいたという点であった。物語や小説の細かな要素が主題と呼ばれるものを形成していること、それらに着目して読むことの重要性を理解した生徒がいたことは、本単元のねらいに応じた成果と言える。 ・授業の成果③ 今回は古典Aを履修している一般プログラムの生徒とDP文学を履修しているDP生で全く同じテキストを使用してほぼ同じ展開で授業を行った。読解の手順に大きな差は見られなかったが、比較・対照する際の観点や最後のレポートの書き方には違いが見られた。例えば一般プログラムの多くが個々の人物や出来事に比較の観点を設定したのに対し、DP生では人物や出来事だけでなく、信仰の問題や物語の作り方、物語が動く要素、人物の関係性などかなり多様な観点の設定が行われていた。 ・今後の課題 一般プログラムにおいては授業時間内で十分に読解作業を進められず、自宅での予習・宿題にせざるを得なかった部分がある。限られた時間の中で反転的な授業スタイルをどこまで合理的に体系化して行えるかが一般的なクラス環境で実装する鍵になると考える。

(文責 杉本 紀子)

3. 2. 単元名 人間の創造性 (対象 高校3年生)

科目名・学年	現代文B・6年（高校3年）
単元名	人間の創造性
時間数	6時間
授業者（発案者）	山根 正博（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
テキスト	三島由紀夫「小説とは何か」（精選現代文B 筑摩書房） 副教材 三島由紀夫「小説読本」（中公文庫） 森鷗外「高瀬舟」（評価課題に取り組む時に使用）
★比較・関連付けの焦点	創造性 日常と非日常 創作という行為の価値

ねらい・意図	<p>スキル・リテラシーの育成 小説を評価する観点を読み取り、その観点に基づいて小説を評価することで、スキルの応用を目指す。</p> <p>概念やテーマの理解の拡張 小説と日常性（または非日常性）について考えることを通して、芸術と日常性（または非日常性）についても考えを広げたい。</p> <p>教材の可能性拡張 ここでの三島の指摘は小説に限ったものではなく、芸術一般に広がっていく可能性を持つ。創作の他領域とつながっていく可能性を持っている。</p>
授業の概要	<p>教科書の「小説とは何か」と、「小説読本」（中公文庫）所収の「小説とは何か」十章・十二章の読解を行い、三島の主張をつかむ。「小説とは何か」十章・十二章で示される『檀山節考』『罪と罰』『幼年期の終り』については、あらすじを確認しながら、三島の主張の理解を深める。その上で課題を提示する。</p>
授業のイメージ *評価：総括的評価 (方法・観点等)	<p>以下の条件でレポートを課した。 ＜三島由紀夫の小説観＞ 授業で扱った三島由紀夫の「小説とは何か」と、今回配布する森鷗外『高瀬舟』について、以下の点を踏まえて、レポートを書きなさい。字数は1200字以上。</p> <p>課題 ①「小説とは何か」で使われる「現実」「超現実」とはどのような内容を指すか説明すること。 ②森鷗外の『高瀬舟』について、三島由紀夫の「小説とは何か」で示された観点から分析し、評価すること。</p> <p>分析（両作品の関連についての分析）と構成（レポートの展開上必要なものがあるかどうか、論理の飛躍がないかどうか）という二つの観点から評価した。</p>
授業の成果・課題	<p>6年（高校3年）の2学期に実施したため、時間の制約があった。もっと時間があれば「高瀬舟」を読んだ上で、三島の説をどう応用できるか、全体で共有する時間を取ってもよかった。時間が不在中ではあったが、課題において多くの生徒が水準以上の理解を示してくれた。</p>

(文責 山根 正博)

3. 3. 単元名 文学の役割 (対象 高校3年生)

科目名・学年	現代文B・高校3年
単元名	文学の役割
時間数	4時間
授業者	若宮 知佐（東京学芸大学附属高等学校）
テキスト	堀辰雄「鼠」、日野啓三「風を讀えよ」／石牟礼道子「後生の桜」
★比較・関連付けの焦点	小説における表現技法とその効果／虚構(小説)と記録(ルポルタージュ)の違い
ねらい・意図	<p>小説の表現技法を分析するスキルを養い、さらに〈虚構〉としての小説と〈記録〉としてのルポルタージュの違いについて考察することで「文学」への知見を深め、言語文化の担い手としての自覚を深めることをねらいとする。今後は教材に評論を盛り込み、評論文の〈表現性〉にも着目させて行きたいと考えている。</p>
授業の概要 授業のイメージ	<p>3年「現代文B」の年間計画の最後に配置した単元である。小説の表現技法については既に、「視点」「語り」「描写」「時間／空間」「キャラクター」「象徴・メタファー」という観点で作品分析を行ってきた。ここでは「少年」を主人公とする二つの小説、堀辰雄「鼠」と日野啓三「風を讀えよ」を取り上げ、次の2点についてグループ討論とクラスでの共有を行った。生徒達は二つの作品を比較することで表現の特色が捉えやすくなったようだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小説Ⅰと小説Ⅱの共通点と相違点を挙げよう。(観点:「語り」「視点」「描写」「舞台となっている場所」「象徴・メタファー」など) 2. それらの表現技法はどのような効果をあげているか。 <p>次に石牟礼道子「後生の桜」を取り上げ、表現上の特色と作品主題との関連性について考察させた。石牟礼は、水俣病を扱った一連の自作について「聞き書きではない」と語ったとされる。内容に目が向きがちな「後生の桜」だが、あえて表現面に着目することで、言葉の芸術としての「文学」の力や役割について考察を深めようとした単元である。</p>

*評価：総括的評価（方法・観点等）	本年度は、上記のねらいに則した包括的評価は実施できなかった。実施した評価としては次の二つである。 1. ワークシートへの形成的評価。（思判表「読むこと」） 2. 定期考査：小説の「表現の特色」に焦点化した短い分析文を書かせて評価対象とした。（思判表「読むこと」）
授業の成果・課題	比較をすることで表現の特色は格段に捉えやすくなる。また、小説とルポルタージュの違いを考えることは、「文学」とは何かを考える上で有効であった。生徒に付いた力をどのように評価するかが課題である。

（文責 若宮 知佐）

3. 4. 単元名 あなたと誰かの三日夜餅（対象 高校3年生）

科目名・学年	古典B・高校3年
単元名	あなたと誰かの三日夜餅
時間数	約10時間
授業者（発案者）	影山 諒（横浜市立東高等学校）
テキスト	『蜻蛉日記』『うつろひたる菊』『大鏡』『太政大臣兼家』『源氏物語』『紫の上の苦悩』
★比較・関連付けの焦点	「三夜しきりて見えぬ」兼家と「町の小路」の女との仲を疑う藤原道綱母。長年一緒に暮らしながら「三日がほどは夜離れなく渡り給ふ」源氏を、「いとただにはあらず」女三の宮のもとに送り出す紫の上。「うつろひたる菊」や「紫の上の苦悩」の場面では、夫が自分とは異なる他の女性と婚姻を結び、そのことに心穏やかではいられない妻の姿が描かれている。この単元では、そうした妻に対する夫の振る舞いに注目し、それぞれの夫がどのように描かれているのか、「日記」や「物語」というジャンルにも注目しながら考察することで、当時の貴族男性や理想的な男性像について考えを深める。
ねらい・意図	<p>【スキル・リテラシーの育成】 本単元では、他の女性と婚姻を結んだ夫の妻に対する振る舞いを比較することから「コミュニケーションスキル」の育成が期待される。また「比較読み」単元に共通して、「情報リテラシースキル」や「批判的思考スキル」の伸長も見込まれる。</p> <p>【概念やテーマの理解の拡張】 設定するIBの重要概念としては「コミュニケーション」や「ものの見方」を想定している。特に「ものの見方」については、『蜻蛉日記』と『源氏物語』の語り手に注目することから設定した。『蜻蛉日記』は作者・藤原道綱母の視点から、一人称的に語られるのに対して、『源氏物語』は三人称的に物語が進められている。語りの違いが物語の見え方にどのように影響するのか、「日記」や「物語」といったジャンルにも注目しながら、文学の方法などにも考えを広げる。</p> <p>【教材の可能性拡張】 「うつろひたる菊」や「紫の上の苦悩」は藤原道綱母や紫の上の心情に注目し、“夫に浮気されてしまう妻の苦悩”を理解することを主眼に、授業が進められている感がある。本単元でも、そうした妻の苦悩は理解しながら、さらにそうした“苦悩”を与える夫の振る舞いに注目し、兼家と源氏の人物像が、語りのあり方にどのように影響を受けながら描かれているのか、理解を促していく。</p>
授業の概要 授業のイメージ	<p>①平安時代の女性の婚姻 『平中物語』38段や『大和物語』103段に描かれる平中と尼になってしまう女の話を通して、「後朝の文」の重要性や当時の婚姻の正式な結び方について理解する。</p> <p>②『蜻蛉日記』における作者に対する兼家の振る舞い いわゆる「うつろひたる菊」の後半の場面、「嘆きつつ…」と「げにやげに…」の贈答歌のやりとりや、「ことなしびたる」兼家の姿から兼家の作者に対する振る舞いについて考察する。</p> <p>③『源氏物語』における紫の上に対する源氏の振る舞い いわゆる「紫の上の苦悩」の場面から、涙ぐみながら言い訳をする源氏の姿や、紫の上と源氏の和歌の贈答のやりとりから、源氏の紫の上に対する振る舞いについて考察する。</p> <p>④『蜻蛉日記』と『大鏡』 『大鏡』にある兼家と藤原道綱母についての一節と、『蜻蛉日記』の一節を比較し、その印象の差について、「物語」と「日記」の語られ方にも注目しながら考察する。</p> <p>⑤ 兼家と源氏</p>

*評価：総括的評価 (方法・観点等)	他の女性と婚姻を結んだ兼家と源氏の妻に対する描かれ方について考察し、レポートにまとめる。 単元の中で学習したことを活かして、兼家と源氏を比較し、日記と物語の語られ方の違いにも注目しながら、当時の現実の男性と理想的な男性がどのように作品の中で描かれているのかについて考察する。
-----------------------	--

(文責 影山 諒)

3. 5. 単元名 「声」(対象 高校2年生)


科目名・学年	現代文B・5年(高校2年)
単元名	「声」
時間数	1(「山月記」8時間のうちの1時間)
授業者(発案者)	西村 諭(東京学芸大学附属国際中等教育学校)
テキスト	中島敦「山月記」(精選現代文B 筑摩書房) 「山月記」朗読音源(音読CD・インターネット) 吉田戦車「伝染るんです」(マンガ)
★比較・関連付けの焦点	文字と音との関係
ねらい・意図	概念やテーマの理解の拡張 文字と音との関係について考えることによって、言葉について興味を抱くことをねらいとした。また、漢文調の文体を扱うことで、文体や言葉におけるジェンダーの影響について考えるきっかけとなることを意図した。 複数の作品との「比較読み」とは言えないかもしれないが、他のメディアを使用した実践を考えるきっかけとなる授業を考えた。
授業の概要 授業のイメージ	「山月記」を7時間学習したうえで、1時間使って実施した。 ①「山月記」冒頭の部分について、複数の朗読音源を聴く。 (1) 男性の声と女性の声による朗読をそれぞれ複数聴き、文体との関わりで考えた時に、どの声が最も文体と違和感がなにか考える。 (2) 漢文調の文体とジェンダーとの関係について考える。 ②「山月記」の李徴のセリフで、傍点が付されている表現について考える。 (1) 傍点が付されているのはなぜか考える。 (2) その部分を声で表現する(もともとセリフ部分のため、声で表現できるはず) (3) 4コママンガ「伝染るんです」と比較して、文字と音との関係について考察する。 
*評価：総括的評価 (方法・観点等)	「山月記」全体についてはレポートおよびペーパーテストで評価したが、この実践については特に評価課題など課していない。
授業の成果・課題	表記された文字と音との関係について考えることによって、言葉の不思議さを実感することができた。文体とジェンダーの関係について、特に翻訳作品などを比較することによって、その影響を探ることができそうである。

図1 吉田戦車『伝染るんです』
第1巻(小学館文庫, 1998)

(文責 西村 諭)

3. 6. 単元名 英雄の語り方(対象 高校2年生)

科目名・学年	古典B・高校2年
単元名	英雄の語り方
時間数	10時間
授業者 (発案者)	横田 哲(高知県立高知国際高等学校)

テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・史記「鴻門の会」(樊噲目を瞋らして項王を視る) 【精選古典B改訂版(大修館書店)】p213～215 ・平家物語「能登殿最期」 【精選古典B改訂版(大修館書店)】p68～71 <p>教材準備や授業実践への敷居を下げるために、教科書教材を活用することを念頭においた。また、教科書教材を使用することで、該当学年で習得すべき古典の基本事項を網羅することも可能となる。</p>
★比較・関連付けの焦点	批判的思考(「議論を形成するために関連する情報を集め、整理する」)
ねらい・意図	<p>スキル・リテラシーの育成</p> <p>大学進学を目指す上で必要となる古文読解・漢文読解に必要な知識・技能の獲得に多くの時間を費やさざるを得ない状況において、どのように探究活動を付け加えるかに挑戦した授業である。探究活動においては、批判的思考スキルの育成をねらいとしている。</p> <p>教材の可能性拡張</p> <p>英雄譚であれば、「国・地域」「時代」「発達段階」といった様々な切り口から比較対象とすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ヘラクレス」等のギリシャ神話 ・「ワンピース」「僕のヒーローアカデミア」等のマンガ ・「ウルトラマンネクサス」等の映像
授業の概要 授業のイメージ	<p>第1時：本単元のねらいと評価課題の共有</p> <p>第2時～第4時：史記「鴻門の会」の読解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本文音読 ・書き下し文確認 ・句法理解(疑問形・抑揚形・再読文字等) ・内容理解 <p>第5時～第9時：平家物語「能登殿最期」の読解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本文音読 ・文法理解(助動詞・敬語等) ・内容理解 <p>第10時：英雄の語りに関する探究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2つのテキストの類似点の抽出 ・松前(1981)・植(2016)による裏づけ ・問「なぜ人々は、英雄話において、『人並み外れた能力』の語りを必要とするのか」に対する考察(個人・ペア) <p>(参考文献)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・松前健「英雄譚の世界的範型と日本文学」(論究日本文学 44 1-19, 1981) ・植朗子「『新しい神話』における英雄の条件—英雄的行為とその心的動機の解釈—」(神戸大学国際文化学研究推進センター 2016年度研究報告書)
*評価：総括的評価 (方法・観点等)	<p>評価方法：ペーパーテスト</p> <p>評価規準：【読む能力】【知識・理解】</p> <p>※古典Bは旧課程のため、観点は旧のものを使用。</p>
授業の成果・課題	<p>本単元の授業においては、比較読みをするために、「どのような観点で読むのか」(本単元でいえば、「英雄がどう語られているのか」)を念頭に置きながらの読みとなった。このように、読みの観点を明示したことによって、文法・句法を学習するものでしかなかった古典が、「読み物」として生徒の前に提示されることになった。授業中においては、樊噲や能登殿の特異な能力の記述に反応を示す(自分が知っているマンガやアニメのキャラクターに当てはめてみるなど)生徒も多く、主体的に学習に取り組んでいる様子が見て取れた。また、授業後に記述された振り返りシートを確認すると、「現代における英雄やヒーローの物語には弱い姿も見られるが、それはなぜだろうか」という記述が多くあり、比較読みによって読みが深まり、発展的な問いを自ら見出せるようになった可能性がある。</p> <p>最後に、「教科書教材を用いた比較読み」という設計を行うことで、大学進学に向けた教科指導を念頭に置いた授業設計の中でも無理なく導入でき、また、教員の個性に依存しない単元にできたのではないかと考える。</p>

(文責 横田 哲)

3. 7. 単元名 『方丈記』 で描かれている災害をどのように伝えるか (対象 高校2年生)

科目名・学年	古典 B・5年 (高校2年)
単元名	『方丈記』 で描かれている災害をどのように伝えるか
時間数	10時間
授業者 (発案者)	宇佐見 尚子 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)
テキスト	嶋長明『方丈記』 「安元の大火」 (『古典 B 古文編』 大修館書店) 嶋長明『絵巻で読む方丈記』 「安元の大火」 「治承の辻風」 「養和の飢饉」 「元暦の地震」 (訳注田中幸江 東京美術 2022年6月)
★比較・関連付けの焦点	表現や構成の比較 / 意図と表現や構成との関連性
ねらい・意図	『方丈記』 で描かれている「大火」「辻風」「飢饉」「地震」について『方丈記絵巻』 も取り上げ、共通点や相違点を分析した。特に、「元暦の地震」では、『方丈記』 にない段が『方丈記絵巻』 で加えられており、そのことによってどのような違いが生まれるのかなど考察した。単元の最後に災害の一つを取り上げ、意図を明確にして効果的に構成して発表する活動を行った。『方丈記』 における表現の特徴やテーマ性を踏まえ、災害についてどのように伝えるべきか、生徒が主体的に考える力を育むことをねらいとした。
授業の概要	1 『方丈記』『方丈記絵巻』 の概要 2 『方丈記』 「安元の大火」 の表現や構成等の特徴を分析 3 『方丈記絵巻』 「安元の大火」と「治承の辻風」の比較 4 『方丈記絵巻』 「養和の飢饉」 の表現や構成の特徴を分析 5 『方丈記絵巻』 「養和の飢饉」と「元暦の地震」の比較 6 『方丈記』 と『方丈記絵巻』 の「元暦の地震」の比較 7・8 「大火」「辻風」「飢饉」「地震」の各グループに分かれて、メディアセンター (図書室) にて発表準備 9・10 各グループの発表・相互評価
*評価: 総括的評価 (方法・観点等)	発表とワークシートで評価。観点はIBDPの観点に準じて本校独自に定めている4観点の中、2観点 (分析/構成) で評価した。
授業の成果・課題	・授業の成果 『方丈記』 の原文の価値や長明の価値観を改めて意識した上で、なるべく本文のままとするのか、わかりやすくしたり脚色したりするのか、グループごとに焦点化し、工夫した発表ができていた。 ・今後の課題 『方丈記』 と『方丈記絵巻』 を比較するにあたって、より時代性の違いに着目し、分析を深められるとよかった。

(文責 宇佐見 尚子)

3. 8. 単元名 「プレゼン・ノート」 (対象 高校1年生)

科目名・学年	現代の国語高校1年生
単元名	「プレゼン・ノート」
時間数	12時間
授業者 (発案者)	小岩井 僚 (ドルトン東京学園)
テキスト	・高須光聖「笑いと快感」 https://youtu.be/6yRBSjcWUME 笑いと何か、コンプレックスを人生の武器に変える笑いの力とは何かをテレビ業界で活躍する高須氏がTEDxTokyoで語っている。 ・三輪開人「e-Education」 https://youtu.be/7fGdwBd_Yuk バン格拉ディッシュの教育改革を行う「e-Education」代表の三輪開人氏がICCカンファレンスFUKUOKA2017において、注目ベンチャー特集で登壇した際に行ったプレゼンテーション。 ・二羽泰子「社会的マイノリティとは何か」 https://youtu.be/uWAIJ9t95II 東京大学大学院によるミニレクチャプログラムの一環で、二羽氏が「社会的マイノリティ」とは何かをいくつかのワークを通して考えていく講義。

★比較・関連付けの焦点	言語表現の工夫・非言語表現の工夫・提示資料の工夫およびその違い
ねらい・意図	目的やオーディエンスの異なるプレゼンテーション動画を視聴し、比較することで、良いプレゼンテーションとはどのようなものかという概念を改めて問い直すことを意図した。
授業の概要 授業のイメージ	<ol style="list-style-type: none"> 話し言葉の特徴とは何かを考える。 高須光聖「笑いと快感」を視聴し、以下の問いを考える。「伝えようとしているメッセージ／内容は何か」「内容伝達のためのプレゼンテーションの工夫は何か」 三輪開人「e-Education」を視聴し以下の問いを考える。「伝えようとしているメッセージ／内容は何か」「内容伝達のためのプレゼンテーションの工夫は何か」「ほかのプレゼンテーションとの違いはなにか。なぜ違うのか」 二羽泰子「社会的マイノリティとは何か」を視聴し以下の問いを考える。「伝えようとしているメッセージ／内容は何か」「内容伝達のためのプレゼンテーションの工夫は何か」「ほかのプレゼンテーションとの違いはなにか。なぜ違うのか」 【テスト】新たなプレゼンテーション動画を視聴し、内容要約および効果的に内容を伝達するための話者の工夫をそれぞれ記述する。 授業全体を通して振り返り、良いプレゼンテーションとはどのようなものなのかについて考察し、記述する。
*評価：総括的評価 (方法・観点等)	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション理解／分析記述【知識理解・思考判断表現】 新たなプレゼンテーションを視聴し、内容要約および効果的に内容を伝達するための話者の工夫をそれぞれ記述する。 ・振り返り【主体的に学びに向かう態度】 授業全体を通して振り返り、良いプレゼンテーションとはどのようなものなのかを考え、記述する。
授業の成果・課題	<p>プレゼンテーションを比較しながら見ることで、それぞれの違いに気づくことができるようになっていった。その違いの理由を考えることで、プレゼンテーションなどを行う際に、気を付ける点を一歩深めて考えることができていた。</p> <p>例えば、三輪氏のプレゼンではインパクトを与えるために最初に強いエピソードを持ってきており、最後にもオーディエンスにとってメリットとなる情報を与えるという構成をとっているという気づきが生まれていた。これは、オーディエンスに投資をしてもらうという他のプレゼンテーションとは異なる目的があるためであるという考えに行きついた。また、最後に視聴した二羽氏の用いたスライドは他のものに比べ文字量が多かった。文字が多くてよくないという意見が初めは出っていたが、議論を深める中で、矢印などを用いて論理を説明しており、スライドを見ることで内容を整理できるようになっているという気づきもたらされた。</p> <p>これらのことから、比較してみることで、プレゼンテーションにおける工夫の違いが明確となり、目的の違いやオーディエンスの違いなどによって、よいプレゼンテーションとはどのようなものかが異なるのだという理解が生まれることとなった。</p> <p>課題としては、視聴した動画が少ないことが挙げられる。より多くのプレゼンテーションに触れることでさらなる気づきもたらされるはずである。</p> <p>また、実際に目的やオーディエンスを定めたいうえでのプレゼンテーションを行うことで、授業にとどまらず、理解を実践に移すことも可能となると考えられる。</p>

(文責 小岩井 僚)

3. 9. 単元名 言葉と私 (対象 高校1年生)

科目名・学年	現代の国語・4年 (高校1年)
単元名	言葉と私
時間数	14時間
授業者 (発案者)	廣瀬 充 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)
テキスト	志賀直哉「国語問題」(評論) 今井むつみ「言葉は世界を切り分ける」『ことばと思考』(評論) アルフォンス・ドーデ「最後の授業」(小説) 田中克彦「『一つのことば』とは何か」『ことばと国家』(評論) 井上ひさし『吉里吉里人』(小説) ラーメンズ「条例」(コント)
★比較・関連付けの焦点	「言語」に関する評論の重ね読み

ねらい・意図	<p>◆概念やテーマの理解の拡張</p> <p>高校1年生の教科書には必ずと言ってよいほど「言葉によって世界を分節し、認識している」という内容の評論教材が載っている。それ自体、生徒にとっては新しいものの見方の獲得につながる面白いテーマではあるが、それをただ面白いだけで終わらせず、言葉が自身のアイデンティティーと密接に結びついているということを深く理解させたいと考え、単元を構想した。また、本単元は、1学期の最初の単元として実施したが、高校での初めての国語の学習を始める上で、自分たちの学習してきた・している「国語」というものが決して普遍的な自明のものではないということや「そもそも国語を何のために学習するのか」を考えさせるために、志賀直哉「国語問題」を読むことを単元の導入として設定した。</p>
授業の概要 授業のイメージ	<p><第1次>志賀直哉「国語問題」を読む ・「フランス語を国語に採用すべき」という筆者の主張や「ある国や地域の言語とはどうあるべきか」について、意見をもつ。</p> <p><第2次>今井むつみ「言葉は世界を切り分ける」を読解する ・「言語は、人の認識と密接に結びついており、世界の見方そのものである」という筆者の主張を理解する。 ・それを踏まえると、「人や国・地域の本来の言語を強制的に変えることは、世界の見方を変えてしまうことを意味する」という点を理解し、志賀直哉の主張に反論する手がかりを得る。</p> <p><第3次>アルフォンス・ドーデ「最後の授業」を読む ・この物語は何を描いたものかを考える。また、この物語が以前教科書に載っていた理由を考え、自分はこれが教科書に載っていてほしいか、考えをもつ。 ・「実際に、アルザスの人々は、悲しんでいたのか」という問いを通して、「『人や国・地域の本来の言語』が一体何を指すのかは、一概には定義できない難しい問題である」ことを理解する。</p> <p><第4次>田中克彦「『一つのことば』とは何か」を読解する ・「方言とするか、言語とするかは話し手や言語共同体、国民国家の意志にかかっている」という筆者の主張を理解する。 ・井上ひさし『吉里吉里人』を参考資料として読み、「言語を何か均質で単一なものとして捉えることで、かえって小さな違いが覆い隠されてしまったり、マイノリティが抑圧されてしまったりする」という点を理解する。 ・ラーメンズ「条例」を参考資料として視聴し、言葉の使い方が強制的に規定されることで起こりうる事態を考える。</p> <p><第5次>評価課題（下記参照）に取り組む ・教員による構成チェック→執筆→生徒による相互評価→提出</p>
*評価：総括的評価 (方法・観点等)	<p><評価課題>1000字以内の小論文（Wordで作成） 言葉とはどのようなものかについて、「個人の認識にとっての言葉」と「国家にとっての言葉」の双方の観点から分析し、それを踏まえて、探究の問い「私（たち）はどのような言葉の使い手であるべきだろうか？」に対する自分の考えを論じる。</p> <p><評価の観点> IB・MYP 規準 C 創作（8点満点） <input type="checkbox"/>分析したことと主張とが効果的に結びついており、論理の飛躍がなく結論まで論じられているか？ <input type="checkbox"/>誤字脱字や文法的な誤りが見られず、語彙・文体（言葉遣い）も適切かつ効果的であるか？</p>
授業の成果・課題	<p>様々な評論を重ね読みすることで、「言語」について多面的に考えることができたように思う。ただし、授業者が単元の方向性をかなり明確に定めたため、最終的に生徒が書いた小論文で似たような主張が多くなってしまった点が課題として挙げられる。今後は、複数資料を通して、多面的に考える視点を与えながらも、一人一人の生徒が自由に考えをもてるような工夫を考えたい。また、本単元は国民国家やイデオロギーの話題を扱う点で、地歴・公民科と連携することも考えられる。今後、具体的な連携の形を模索していきたい。</p>

(文責 廣瀬 充)

3. 10. 単元名 象徴とコミュニケーション (対象 中学校3年生)

科目名・学年	国語 中学3年
単元名	象徴とコミュニケーション
時間数	18時間
授業者（発案者）	高松 美紀（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
主なテキスト	井上ひさし「握手」／清岡卓行「ミロのヴィーナス」 石川啄木『一握の砂』／星野富弘『風の旅』より「きく」（1977）

★比較・関連付けの焦点	「手の象徴」—象徴は受け手に豊かなメッセージを送ることができる
ねらい・意図	象徴の性質や機能、象徴と受け手との関係を考えさせる。 独自に象徴を解釈し、論理的に表現するスキルを養う。
授業の概要	1 「握手」のテーマ・モチーフを考える。題名、作品中の「ハンドサイン」の使われ方に着目して話し合い、発表する。 2 「ミロのヴィーナス」の作者の主張と表現を理解し、「手」がもつ特徴的な意味と「千変万化する」象徴の可能性を考える。 3 星野富弘「きく」（詩）と石川啄木『一握の砂』（短歌）を比較し、象徴の違い、言葉の組み合わせによるイメージの構築、受け手の経験による解釈への影響を話し合う。「象徴はコミュニケーションとしてどのような性質を持っているのか」考える。 4 「ビジュアルアーツ×ランゲージアーツ（ミニ小論文）」 「手」を題材にしたビジュアルアーツ（絵画、写真、イラストなど）を一つ取り上げ、その象徴について400字～600字で書く。
主な評価	形成的評価…ワークシートや観察など。テキストにおける象徴の解釈、比較、象徴の性質と可能性についての考えを表現する。 総括的評価…テキストの内容理解、意見記述。小論文は、創作、構成、言語、出典記載、振り返り、をルーブリックにより評価。
授業の成果・課題	[成果] 第一に、比較によって、個別の文学テキストの内容理解に終わらず、表現とコミュニケーションとしての「象徴」の性質や効果について多面的、概念的に理解することができた。第二に、ビジュアルアーツを用いた小論文を課したことで、題材選定に独創性を発揮でき、象徴のコミュニケーションとしての性質を主体的により明確化できた。第三に、学習スキルの獲得について、特に小論文では、型と例示、ルーブリックによって、ほとんどの生徒が解釈を論理的に述べ、出典を正確に記載することができた。 [今後の課題] さらに多様な言語や文学のスタイル・テキストを検討し、音楽など他分野の表現と比較することで、象徴の性質や文化的な影響などについてより深く理解していきたい。

(文責 高松 美紀)

4. 比較・関連づけの焦点—テキストをどう組み合わせるか

「比較読み・つなげ読み」の単元を設計する際には、複数のテキストをどんなねらいをもってどのように組み合わせるかが重要となる。本研究では複数のテキストが組み合わせられ・関連付けられる接点を「比較読み・つなげ読みの焦点」として、実践例・単元案例を整理している。ここでは前項における実践例・単元案例に示された「比較・関連づけの焦点」について、現時点でどのような傾向が見えるのかについて述べておきたい。前掲の実践例・単元案例は全部で10例掲げられている。それらの「比較読み・つなげ読みの焦点」として示されているものをいったん以下の3項目に分類してみる。

①概念

「概念」は国際バカロレア (IB) Middle Years Programme および Diploma Programme でいうところの Concept に近いものである。「Concept」は国語科あるいは IB の「言語と文学」で扱うテキストの特性やその理解に必要な要素である。

②スキル

「スキル」は IB の掲げる ATL (Approaches To Learning) スキルだけでなく、中・高の学習指導要領に掲げられている技能も含む。今回の実践例では二つの実践がそれぞれ「批判的思考」とプレゼンテーション等における「表現の工夫」というスキル・技能に焦点をあてて作品を組み合わせていると考えられる。

③内容・テーマ

今回の実践では、テキストの内容やテーマと言えるものを比較の焦点として明示しているのは2例だが、実は①の概念や②のスキルを焦点としつつ、内容やテーマで作品間に関係が見いだせる組み合わせも複数存在する。たとえば前掲3. 1の単元は、典拠とその翻案を比較する単元であり、「主題」という概念を焦点として設計しているが、当然のことながら二作の内容には類似性・共通性がある。

内容やテーマを焦点とする作品の組み合わせは、現行の教科書に採録されている教材にも見ることができる。ただし内容やテーマを焦点として、比較させたり、つなげさせたりする場合は、その単元が何をねらいとしているのかが重要であろう。比較自体を目的とするのか、あるいは比較を通して何かを理解することを目的とするのかによって、学習の深化の様相は変わってくるように思われる。

前掲の実践例の記録においては、授業のねらいの部分に①の概念や②のスキルが記載されている場合もある(前掲3. 4)。そうした実践においては、比較・関連づけの焦点は③内容・テーマとして内容的に共通性や関連性のあるテキストを比較させ、内容理解の深化や拡張を目指す一方で、テキスト間に見える表現の相違から「ものの見方」というような概念を理解させることをねらいとしている。

今回掲げた実践例や単元案から見えてくるのは、テキストの比較・関連づけの焦点・接点は、単純に1つに絞れるわけではなく、複数があり得るということだ。しかもそれぞれが「概念」「スキル」といった異なる位相のものである可能性もある。比較読みの単元を設計する教員は、こうした複数の比較・関連づけの焦点・接点を、どのように位置づけるかを考えながら、授業をデザインしている。

所謂比較読みの単元が多く実践されつつもなかなか体系化にたどり着いていないのは、比較・関連づけの焦点・接点のこのような多様さ、それに起因する単元構造の多様さ・複雑さに起因するのかもしれない。しかし、もし一つ一つの実践・単元の構造を丁寧に展開し、それらの効果を検証しつつ、比較読み単元の体系化を試みることができれば、比較読み単元がもつどのような構造が、いかなる知や知の統合につながるのかが見えてくるのではないかと考えられる。

(文責 杉本)

表1 令和4年度の本プロジェクトの実践例に記載された「比較・関連づけの焦点」

①概念	<ul style="list-style-type: none"> ・ 典拠と翻案：主題（主題の違いを生み出す要素）【前掲3. 1】 ・ 創造性：創作という行為の価値【前掲3. 2】 ・ 小説における表現技法とその効果【前掲3. 3】 ・ 虚構（小説）と記録（ルポルタージュの違い）【前掲3. 3】 ・ 文字と音の関係【前掲3. 5】 ・ 意図と表現や構成との関連性【前掲3. 7】 「手の象徴」—象徴は受け手に豊かなメッセージを送ることができる【前掲3. 10】
②スキル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 批判的思考スキル（議論を形成するために関連する情報を集め、整理する）【前掲3. 6】 ・ 言語表現の工夫・非言語表現の工夫・提示資料の工夫【前掲3. 8】
③内容・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常と非日常【前掲3. 2】 登場人物の振舞いの描かれ方とジャンルの違い：理想的男性像【前掲3. 4】 「言語」に関する評論の重ね読み【前掲3. 9】

5. 今後の課題と次年度の展望

令和4年度においては、設計した単元を実践しその効果を検証することに重点をおいた。結果として昨年度よりも多くの実践がなされ、一部は効果検証に取り掛かることができた。また、それぞれの単元がどのようなねらいや比較・関連づけの焦点をもってテキストを組み合わせているのかを分析してみると、比較読み単元が持つ構造の特徴的な点が見え始めたと言える。本研究は次年度に向けて研究計画を申請中であるが、次年度も新たな単元の設計と実践を継続しつつ、比較読み単元を体系的に整理することを目指したい。それが学習者である生徒の「知の統合」という作用のあり方を明らかにする土台となると考えられる。

(文責 杉本)

引用文献

- ・ 図1 吉田戦車『伝染るんです。』第1巻(小学館文庫, 1998)

付録：表2 比較読み単元一覧表（抜粋）令和4年度追加部分

科目名 あるいは関連する ジャンル	作品1	作品2	作品3	作品4	単元のねらい	単元の問い	主な活動・単元のイメージ	組み合わせの視点 時代/ジャンル/映像・メ ディア/社会問題/概念
現代文・古典	トマスモア「ユートピア」	陶淵明「桃花源記」	作品3	作品4	単元のねらい	単元の問い	主な活動・単元のイメージ	組み合わせの視点 時代/ジャンル/映像・メ ディア/社会問題/概念
現代の国語	産産堂「美しいと快感」 TEDx https://youtu.be/6yRB3jWUM	三輪朋人「e-education」 https://youtu.be/7fGwMBd_Yuk	二羽子「社会的マイノリティとは何か」 https://youtu.be/1WAAU995II		理想を「語る」という行為に込められた人々の思いを考える	理想は何を「語る」のか？ よいプレゼンテーションとはどのようなものか。 プレゼンテーションではどのような工夫をしてメッセージを伝えているのか。	それぞれの動画においてプレゼンターの工夫とその効果を考え、それぞれの工夫や方法の違いについてなぜ違いが生じるのかを考察する。	
古典探究または文学 国語	井原西鶴『武道伝来記』巻2の4「命とらるる人魚の海」	太宰治『新編西鶴』「人魚の海」			典拠と翻案を比較し、その主題の違いを捉え、主題を支えているものが何かを考える。	「主題」の違いは何によって生み出されるのか。	典拠と翻案を比較して読む。 自分で比較の焦点を定めて分析し、何が主題の違いを生み出しているのかを考え、論じる。	
文学国語	アイヌ神謡集	おもしろし	万葉集	現代詩歌（いわゆる歌詞でもよい）	言語とアイデンティティの関係に気づく。言語が消滅するということなどが何を意味するのかを考える。	民族・文化独自の詩歌が持つ表現は、文化のアイデンティティをどのように表しているのか。	アイヌ語や琉球語について調べ、詩に用いられた言葉や表現にどのような文化や価値観が反映されているかをとらえる。	
言語文化	芥川龍之介『羅生門』	『今昔物語集』 『羅城門堂上屋敷死人盗人語』他	星新一 「白い服の男」	NHK『星新一の不思議な不思議な短編ドラマ』 「白い服の男」	表現の差異による主題の変化や作者（制作者）の意図について考察する。	「改稿」や「翻案」は作品の主題にどのような影響を与えているのか。	作者自身の改稿や、他者の翻案による違いを分析・考察し、レポートやティベートを行う。	コミュニケーション/表現/メディア
言語文化	林京子「空き缶」	選択教材（文学） 『夜と霧』 『海を渡る』 『十二月八日』	選択教材（非文学） 『R4平和宣言』 ハンガリー旅行記 池上彰「アジアの未来の作り方」ベトナム編		複数の作品の「語り」や「語り手」の特徴を比較し、作品における語り手の意味を考察する。	それぞれの作品では「争い」をどのように語っているか。	「空き缶」と「待ち伏せ」を比較し、考察文を執筆した後、選択教材から2作品を選び、比較し、ポストターにまとめる。	もの見方/争い/一人称の語り手
現代の国語	志賀直哉「国語問題」（評論）	今井むつみ「言葉は世界を切り分ける」『ことばと思考』（評論）	アルフォンソ・ドーテ「襲後の授業」（小説）	田中克彦「『一つのことば』とは何か」『ことばと国家』（評論） 井上ひさし「吉里吉里人」（小説） ラーメンズ「条例」（コント）	「言語」に関する評論の重ね読みをし、多面的に分析するための視点を獲得する。	私（たち）はどのような言葉の使い手であるべきだろうか？ 特定の言語を用いることには、人間にとって、どのような意味や影響があるのか？ 言葉と個人の認識とはどのような関係にあるのか？ 言葉と国家・地域はどのような関係性にあるのか？	「言語」に関する評論の重ね読みをし、多面的に分析する。最終的にはどのようなものかについて、「個人の認識」としての言葉と「国家」としての言葉との双方の観点から分析し、それを踏まえて、単元の問いに対する自分の考えを論じる小論文を書く。	言語論、言語と認識、言語と国家、言語論的転回、アイデンティティ、国民国家
現代の国語	山崎正和「水の東西」（評論） ベネディクト・アンダーソン「菊と刀」（評論） 御真理「開かれた文化」（評論）	ステラ・ヤング「感動ポルノ」（スビーチ映像）、伊藤隆重「共鳴し引き出される力」（評論）、「『かわいそうランキング』が世界を支配する（ブログ）」	今福龍太「意味論的旅と越境」 「文化の交差点で」（評論） アメリカとメキシコの関係性やメックスアメリカに関するインターネット記事	『こんな夜更けにバナナかよ』（映画）	「異文化」や「他者」に関する評論の重ね読みをし、多面的に分析することができるか？ 「かわいそう」という感情や強え方に対して、私たちがどのように向き合うべきか？	どうしたら対立や分析を乗り越えることができるか？ 「かわいそう」という感情や強え方に対して、私たちがどのように向き合うべきか？	「異文化」や「他者」に関する評論の重ね読みをし、多面的に分析する。最終的には元問いに対する自分の考えを論じる小論文もしくは問題文を書き、	文化論、異文化、異なる他者、「かわいそう」という感情、共鳴、越境